

海外出張報告

JICA「カンボジア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、タイ、ベトナムにおける家畜疾病防除計画地域協力プロジェクト（フェーズ2）（ADC2）」
短期専門家（豚繁殖・呼吸障害症候群）

出張期間：平成22年8月17日～10月9日

TAKAGI Michihiro

ウイルス病研究チーム 主任研究員 高木 道浩

「カンボジア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、タイ、ベトナムにおける家畜疾病防除計画地域協力プロジェクト（フェーズ2）（ADC2）」は、対象6カ国の家畜疾病診断技術の向上と国内および地域内での家畜衛生ネットワークの構築を通じて地域内の家畜疾病防除を図ることを目標として進められています。同時に、各国内でモデルエリアを選定し、国内の家畜衛生向上を目的とした活動も行っています。私は、このADC2内で豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）に対する短期専門家として平成22年8月17日から10月9日の期間を含めて計4回、ベトナム社会主義共和国（ベトナム）に派遣されました。ベトナムは、インドシナ半島の東部に位置し、南北に長い国土で中国、ラオス、カンボジアと国境を接しています。人口は約8,800万人、労働人口のうち農林水産業はおよそ2,970万人を占めています（FAOSTAT）。経済成長が著しいものの未だに、産業の主流は農林水産業で、家畜の飼養頭数は、水牛289.8万頭、牛633.8万頭、豚2,670.2万頭、家禽248百万羽

（General Statistics Office of Vietnam, 2008）に上ります。日本と比較して、飼養頭数はどの家畜も多く、特に豚、家禽は経済の発展に伴って需要が増加していることから飼育頭羽数が多くなっています。家畜の飼養形態としては、小規模の家族経営が主体となっていますが、近年は、産業的な経営が増えてきています。養豚では、全体のおよそ8割がバックヤードでの飼育であり、濃厚飼料の給与は少なく、残飯などを与えています。

ベトナムにおける家畜の伝染病には、様々なものがありますが、口蹄疫、豚コレラ、高病原性鳥インフルエンザなどが特に問題となっています。さらに、2006年に中国で発生した高病原性PRRSが、2007から2008年にかけてベトナムでも大流行し、3ヶ月間で30万頭の豚が失われました。このプロジェクト期間内の2010年4月にも北部で高病原性PRRSが再び流行し、その後、中部、南部と流行が拡大していきました。この高病原性PRRSは、従来のPRRSとは異なり、離乳豚、育成・肥育豚、母豚、雄豚のどのステージにおいても高い致死率を示し、高熱を主徴とします。

私は、ハノイにあるNational Center for Veterinary Diagnosis（NCDV）や地方のRegional Animal Health Office（RAHO）に赴き、PRRS実態解明に向けたフィールド調査、診断技術やPRRS防疫対策などについて指導、支援を行ってきました。フィールド調査では、ベトナム中部の都市ダナン近郊のカンナム州においてバックヤードで飼育されている豚でのPRRSウイルスの検出とその抗体調査を行いました。流行時に多くの豚が死んだことや殺処分を行ったことから調査した豚ではウイル



スは検出されず、また、ほとんどの豚で抗体を保有していませんでした。さらに、過去にPRRSの発生があった北部、中部、南部のブリーディングファーム(母豚100から150頭)でも同様の調査を行いました。PRRSの発生から一年が経過した農場では、ウイルスは検出されず、離乳豚や育成・肥育豚では抗体を保有していないことからPRRSウイルスが農場内から消失したものと考えられました。感染する個体がいなくなり、ウイルスが排除されたものと考えられます。

また、6ヶ国の担当研究者に対してPRRS診断についてのトレーニングコースをJICAの主催で開き、同じ短期専門家として恒光裕ウイルス病研究チーム長と川島健司上席研究員、タイNIAHのDr. Sujira Parchariyanon、FAOの乾健二郎専門員、NCVD副所長Dr.Tung NguyenをはじめとしたNCVDのスタッフと共にPRRSのウイルスと病理について講義や実習を行いました。

さらに、タイやマレーシアで行われたRegional Epidemiology Study Model Workshopにおいては、疫学の短期専門家として筒井俊之疫学研究チーム長と小林創太主任研究員を中心に各国担当者との議論と調査報告が行われ、PRRSに関しても調査結果や最新知見などの情報を共有し、関係国の



PRRS防疫対策への助言を行いました。

東南アジアの国々では、家畜の伝染病が広く蔓延しており、大きな問題となっています。近年、高病原性PRRS、高病原性鳥インフルエンザ、ニパウイルスなどの新興・再興感染症の発生も見られており、本プロジェクトの家畜疾病防除計画や地域協力はとても重要となることと思います。2011年2月をもって本プロジェクトが終了することは残念なことです。動衛研がOIEのコラボレーティングセンターに認定されたことから、今後ともベトナムをはじめとした東南アジアの各国との共同研究や技術協力といった国際協力を進めていくことが必要であると考えます。

TOPICS

農研機構国際シンポジウム「PRION JAPAN & CANADA」を開催

平成22年11月11日と12日の2日間にわたり、東京、五反田の「ゆうぼうと」において農林水産技術会議事務局、PrioNet Canada、Alberta Prion Research Institute、Alberta Livestock and Meat Agency Ltd.の協力により国際ワークショップとして農研機構国際シンポジウムを開催しました。これは動物衛生研究所の実質的な主催で行われ、農林水産省委託プロジェクト研究「鳥インフルエンザ、BSE等の高精度かつ効率的なリスク管理技術の開発」のBSE研究グループによる研究成果をもとに、今

後の研究の方向性について討論し、国際共同研究や若手研究者の教育の場として活用することが目的です。プリオンの基礎研究、BSEの研究、CWDの研究、プリオンの不活化、BSEのリスクマネージメントのセッションに分けて、日本とカナダからそれぞれ研究課題を持ち寄り、本質的で踏み込んだ活発な議論が行われました。参加者もカナダ23名、英国1名、日本86名の合計110名にのびりました。わが国のBSEプロジェクト研究における基礎から応用までの範囲の広さと研究レベルの高さ

について参加者から賞賛を受けました。カナダから共同研究の話と今後もこのような研究会を継続したい旨の申し出もあり、成功裏に終了しました。

(プリオン病研究センター長
毛利資郎)

